

## 乳児クラスの保育より(6)

# Sちゃんのじゅびマーク

田 辺 敦 子

学校や幼稚園等と違い、保育園にはまとまった夏期休暇がありません。ご家庭の都合に応じて個々に欠席する場合がありますが、保育園自体は夏の間中開園しており、保育も平常通り運営されています。それにも拘らず、世の中の動きにリズムを合わせられているのか、秋になるとなぜか心機一転したような新鮮な気持ちで保育に向かっている自分が見つきます。また、夏の間もずっと顔を見ていたはずの子どもたちの笑顔がとても新鮮に見えたり、夏の間のような体験が、一人ひとりに大きな成長をもたらしたことが実感できたりして、とても幸せな気持ちになります。新学期が始まるこの季節は、誰

にとっても新鮮さを味わえる嬉しい季節なのでしょう。

さて、秋になり一歳児クラスの保育室にも、子どもたちの言葉がとびかうようになってきました。覚えた言葉を声に出して試してみることが上手になってきたこともあり、遊びの中で実践練習を繰り返しながら、いつしかどの子どもも仲間の名前をすっかり覚え、声に出して言えるようになってきました。

興味深いことに、自然に仲間の名前を覚えるためのオリジナル練習法が子どもたちの中でどんどん開発されていきました。中でも流行したのはゲーム感覚の遊びで、大人を相手に仲間の名前を言い当てていくというものでした。言い当てたい子の方を見たり指差したりしながら「Mちゃん？（あの子はMちゃん？）」「Sちゃん？（あの子はSちゃん？）」と確認していくのがスタンダードな方法ですが、仲間の名前が出てこないときに「あれは？（あの子はなんていうの？）」と質問する方法も覚えてきました。

この遊びは、初めのうちは高月齢の子どもたちの間で盛んだったのですが、低月齢の子どもたちもすっかりその様子を観察していたようで、高月齢の子どもたちの間でその遊びが下火になった頃に再び盛り上がりを見せていました。特にYちゃんは、オムツ交換や着替えなどのちょっとした時にも節をつけて「Mちゃん！……Aちゃん！……Jちゃん！……」と言葉遊びのように口ずさむほど仲間の名前を声に出すことに夢中になっていました。それまでYちゃんは他児とのやりとりがあまりなかったのですが、こ

の遊びを満喫したことにより、仲間への意識が高まり、普段の遊びでも仲間の誘いに応じたり、自分から他児の遊びの中に参加していったりするようになりました。また言葉への興味も湧いてきたようで、一語文の数がかなり増え、頻繁に言葉で意思を表現するようになりました。

また、時々大人側からもこの名前当て遊びについてのアクションを起こすことがありましたが、そこでも意外な展開がありました。試しにその場にいる子だけではなく、いない子の名前も呼んでみたのですが、その際、高月齢のSちゃんは「いない」と答えた後に、「もういない。お母さんと帰った」と再び言葉を足して伝えてくれたのです。どうしていないのかという理由まで付け加えられる思考力と仲間の行動をしっかり把握していることに感心してしまいました。それ以来、他の子どもたちの中でもない子についての関心も高まっていき、「Kちゃんは？」とその日欠席している子のことを聞いてくるようにもなりました。仲間の名前を覚え合ったことは、仲間関係を深めただけでなく、仲間の存在をより明確に意識していくことにも繋がっていったように思います。自己の世界から、仲間の中へと拡がりを持っていくこの時期らしい意味深い遊びだったのではないのでしょうか。



ところで、私の保育園の園児たちには、入園から卒園まで継続して使用する各々のシンボルマークがあります（マークには動物や乗り物、花や果物など身近なものを使っています）。下駄箱やロッカー、椅子やノートなど、子どもの指定場所や個人使用のものには必ずこのマークが付けられており、そのマークを見ればひと目で誰のものかということが子どもたち自身にもわかるようになっていきます。自分の周りの世界について関心を持ち始めている子どもたちは、このシンボルマークにも興味を抱き始めました。生活や遊びの中で自分のシンボルマークが登場すると、「Sちゃんのうさぎマーク」「Kちゃんのトンボ」と、目を輝かせてアピールしていました。そして、シンボルマークへの愛着が生まれたことにより、うさぎやトンボ自体への興味も深まりました。

大人もこれらの子どもの気持ちをしつかり受けとめ、受け返していくようにしました。例えばSちゃんの担当保育者は、食事の際Sちゃんが人參を食べたがらなかった時に、食べることを強要するのではなく、「うさぎさんは、どんなものを食べるか知っていますか？」と投げかけ、「人參も食べるかしら？」「人參はよく噛むと甘くなるから、うさぎさんの大好物かもしれないわね」など、Sちゃんの興味に関連づけた言葉掛けをしていました。すると、Sちゃんもその働き掛けに心を動かし「Sちゃんも人參食べる」と言って自ら人參を口に入れることができました。また同じく、Kちゃんが人參を嫌がった場面でも、「この人參とってもきれいなね。夕焼け色をしているわ。トンボは夕焼けお

空のオレンジが好きなんですって」「トンボが好きな夕焼け色の人参、私も大好き」など、トンボや自分のことに置き換えて話していました。すると、やはりKちゃんも愛着あるトンボと担当保育者の仲間に入りたくなったのか、自然と人参に目がいき、能動的に人参を食べていました。担当保育者のさりげない一連の言葉掛けは、そばで聴いていた私も「なるほど」と感心しましたが、当の子どもたちもすっかり心を動かされ、大好きなうさぎやトンボに思いを馳せながら人参と向き合うことができました。

このように、ひとつの事柄への興味が、その先の行為や遊びに繋げていくための足掛かりになってくれることもあります。その役を担ってくれているのがどういふものなのか、いつも子どもたちの「今」に心を寄せながらキャッチしていきたいと思います。

最後になりますが、シンボルマークへの興味をヒントに、最近私たちはフェルトや綿を使って、立体的で付け替え可能なシンボルマークの壁面遊具を作りました。今子どもたちは、仲間のマークを確かめ合いつつ、また新たな遊びを見出している毎日です。

(かしのき保育園)

☆この連載は今回で終わります。